

3) 予測結果

海域生物の生息環境の変化は、環境保全配慮として、赤土等流出防止対策を講ずることにより、濁水を機械処理した水（以下、この節では「処理水」という。）が海域に流入したとしても、SSの寄与濃度0.1mg/Lの拡散範囲でみると、最大で轟川を基点に沖方向に250m、陸岸に沿って北側に約200mと轟川河口域に限定されており、海域の水質に及ぼす環境程度の程度は極めて小さいと予測され、また、工事に伴う赤土等の堆積が底質に及ぼす環境影響の程度は極めて小さいと予測されている。以上のことから、海域生物の生息環境の変化は極めて小さいものと予測される。この結果を踏まえ、海域生物について以下のとおり予測した。

(1) 主な海域生物に係る生物相の状況

① 植物プランクトン

植物プランクトンは、水中の栄養塩類を吸収して光合成を行うことにより増殖するが、工事に伴い海域へ負荷される濁りが著しい場合、海中への光の透過率が低下するため、植物プランクトンの光合成活性が低下し、増殖に影響を与えることが考えられる。

しかし、海域へ負荷される処理水の影響は、轟川河口域に限られ、SSの寄与濃度の程度も極めて小さいことから、植物プランクトンの出現状況の変化はないものと予測される。

② 動物プランクトン

動物プランクトンは、水中の植物プランクトンや有機懸濁物をろ過して捕食する種類が多いため、工事に伴い海域へ負荷される濁りが著しい場合、植物プランクトンの出現状況の変化に伴い、その摂餌活動に影響が及ぶことが考えられる。

しかし、海域へ負荷される処理水の影響は、轟川河口域に限られ、SSの寄与濃度の程度も極めて小さいこと、餌料となる植物プランクトンの出現状況の変化はなく、動物プランクトンの出現状況の変化はないものと予測される。

また、事業実施区域周辺海域の動物プランクトンは藻場内で群集として生活しているものが多く確認されたが、後述するとおり、藻場の生息環境の変化は小さく、藻場の分布状況の変化はないものと予測されることから、藻場内で群集として生活する動物プランクトンの出現状況の変化はないものと予測される。

③ 魚卵・稚仔

魚卵・稚仔については、工事に伴い海域へ負荷される濁りが著しい場合、濁り粒子が卵膜や稚仔のえら粘膜に付着して、生残率や呼吸機能に影響を与えることが考えられる。

しかし、海域へ負荷される処理水の影響は轟川河口へ限られ、SSの寄与濃度の程度も極めて小さく、魚類の主産卵場であるグチ付近から離れていることから、魚卵・